私の玉潰し遍歴 *by SMITH*

私の名前はジャネット。いま十九歳です。

はじめて男性が睾丸を打たれたのを見たとき、私、ほんとに目が離せなくなったのを覚えてます。でも、こんなに後々まで尾を引くことになろうとは思ってもいませんでした。

あれは四年生のとき。私のいちばんの親友のキムが、ある男の子を蹴ったんです。男の子の名前はサム。しょっちゅう私たちにうるさくつきまとって、困ってたんです。あるとき、キムが私にこう言いました。

「あいつを追っぱらう、いい手がある」

私は「やってみて」と答えました。すると彼女は、自信たっぷりに私たちを見ていた彼につかつかと歩み寄り、まともに股間を蹴りあげたんです。あっという間に、彼は這いつくばっていました。私は何が起こったか理解できませんでした。キムに訊ねると、彼女は、

「あそこが男のいちばんの急所なんだよ」

と教えてくれました。

実際に自分でやってみたのは、それからしばらく後のことです。やっぱり怖かったんだもの。そう、あれは十四歳のとき、高校に入学したばかりの頃でした。私には兄弟が二人います。兄はジェリー、あのとき十六歳。それに一つ年下のジョーイです。兄はガールフレンドができたばか

りで、しょっちゅう電話にかじりついては、お喋りしていました。
　ある日、私はキムに電話するために受話器をとりました。すると、ジェリーがやってきて、彼女に電話したいと言いだしたんです。私は「やだ」と断りました。私がキムと話している間も、ジェリーはイライラしながら、早く電話をよこせ、と言いつづけました。数分後、ついに彼は実力行使に出ました。いきなり電話を切ってしまい、受話器を奪い取ってガールフレンドのダイヤルを押しはじめたのです。私は逆上し、その場を立ち去ろうとして、ふと、抗いがたいアイデアが浮かんだのです。
　私は踵を返し、彼女とのお喋りをはじめた兄のところに戻りました。私の視線は、兄が穿いているだぶだぶのジーンズのなかにある例の「袋」の在り処に注がれました。私は、彼の睾丸を後ろから蹴り上げたのです。
「うっ」
　彼は呻き、何歩かよろめくと、がっくりと床に這いつくばったのです。彼の両手は股間を庇うように押さえ、眼には涙が溢れていました。受話器からは、兄の彼女の、どうかしたの？　という声が流れていました。私は無言で電話を切りました。
　それから一週間、私は、もう一度、男の股間を蹴るための方法を考え続けました。結局いちばん簡単な方法をとり、標的を弟のジョーイに定めました。彼は年にしては小さく、私よりもちびでした。そのころ、私たちはよく格闘ごっこをして遊んだものです。私は、ジョーイを格闘ごっ

こに誘いました。そして、わざと彼の手が、私の乳房を打つように動いたのてす。私は怒ったふりをしました。
「二度とやんないで！」
　ジョーイは笑って、
「偶然だよ、偶然」
　と言いました。その瞬間、私は猛然と彼に襲いかかりました。彼の腕をつかんで後ろ手にねじ上げたのです。言いましたとおり、彼は私よりもちびでしたから、やるのは簡単でした。腕をねじあげられながらも、彼は笑い続けました。これも遊びだと思っていたのでしょう。私は後ろに手を振り上げ、彼の睾丸に拳を打ち込みました。
　ジョーイの笑い声がやみ、彼はがっくりと膝をつきました。腕を離すと、彼は床に這いつくばったのです。やはり両手で股間を押さえながら。
　彼は泣きながら、体を前後に痙攣させていました。私はびっくりしました。彼の睾丸がとても柔らかく感じられたからです。ジェリーを蹴ったときには気づかなかったのですが睾丸ってとても柔らかいものなんだ、ということを知りました。
　男のきんたま。柔らかい急所。男を強くする器官であると同時に、男を弱くする器官。
　この考えは私を興奮させました。弟のジョーイは、彼の柔らかな急所を押さえて苦しみもがいています。でも、その二つの玉は、いつの日か彼に快楽を与えてくれるのです。私は弟を愛して

いましたから、急にすまないと思いました。
彼は後に、あそこを打たれたのは始めてだった、と私に告げました。
「でも友達が言ってたけど、あんまり強く打たれたりすると死ぬこともあるらしいよ」
私は彼に謝りました。
「だって、あんなことになるなんて知らなかったんだもん」
と弁解しながら。

次に、男の睾丸を潰したたのは、つい昨夜のこと。その夜から、私は別の世界に脚を踏み入れてしまったのです。
私は、家から二時間ほどの場所にある街のクラブに独りでいました。両親には、そこでパーティがある、と言って家を出たのです。
数人の高校生が入ってきました。そのなかに、とても可愛らしい男の子がいました。
彼がトイレに立ったとき、私は後をつけ、出てきたところで声をかけました。彼の名前はジョシュといいました。私はまだ処女で、初体験の相手を探していました。彼は、さほど筋肉質ではなく、可愛らしい顔をしていました。彼は、街の向かいにある友人のアパートに行かないか、と私を誘いました。私は、誘いを受け入れました。
彼は、友人たちに何か言うと、私と一緒に外に出ました。彼は私に、自分は十七歳だと告げま

した。私が「初めてなの」と打ち明けると、自分もそうだ、と答えました。
そのアパートに着くと、ジョシュは時間を惜しむように、いきなりシャツとズボンを脱ぎ捨てました。私が彼のパンツを下ろしてやると、彼は私を絨毯の上に押し倒しました。私は彼が包茎であることに気づきました。私の兄や弟の裸を見たのはもっと昔でしたが、彼らはもう包茎ではなかったんだけど。
私が最初にしてあげたのは、彼の亀頭を覆っていたざらざらした皮を剥いてあげたことでした。私は、ほんとうは大きく隆起した亀頭を望んでいました。でも、そんなことはこの際いい、と自分に言い聞かせました。皮を被ったペニスでも、私が欲しているものを与えてくれるはずだから、と。
私は、彼のペニスを愛撫しはじめました。先端から根元まで。やがて彼のペニスは二〇センチ近くまで勃起しました。私の愛撫でそこまで大きくなったのです。その間、彼は気持ちよさそうに呻いていましたが、私は服を着けたままでした。何時になったら、彼は私を同じように気持ちよくしてくれるのだろう、と思いました。
ふと、私はあることを思いつきました。私はジョシュの睾丸を掌で包んでみました。皺だらけの陰嚢のなかの睾丸は固くはちきれそうでした。それは、私が十三歳の弟のそれを打ったときとは違う感触でした。ジョシュは、私に睾丸を愛撫されて気持ち良さそうでしたので、私はその行為を続けてあげました。

五分ほどそうしていたでしょうか、彼は私を見て、「嘗めてくれるかい？」と言ったのです。まだ、フェラチオをされたことがない、ぜひしてほしい、というのです。

私もフェラチオは初めてでした。彼にとって、最初にフェラチオをしてもらうのに相応しい相手ではないのではないか、と躊躇しましたが、結局「してあげる」と答えました。私は膝まずいて彼の股間に顔を寄せ、ペニスを口でくわえました。ジョシュが呻き声を洩らしました。彼の、太く漲(みなぎ)った亀頭が私の舌に包まれて激しく上下しました。

突然、彼は私の口からペニスを引き抜きました。たった数秒でした。彼はいってしまったのです。彼は大きくため息をつき、自分のペニスをしごきはじめました。あっという間に床に精液が迸りました。よかった……私は思いました。今度は私にしてくれる番だと。

ところが、ジョシュは「ありがとう」と言っただけでした。私が、

「どうするつもりなの？」

と訊ねると、

「クラブに戻ろうかな」

と、大きく肩で息をしながら答えたのです。あんまりでした。

私は彼の陰嚢をつかみ、ぎゅっと強くひっぱりました。ジョシュは驚いたように叫び声をあげました。彼のペニスがあっという間に収縮しました。彼の赤い亀頭は再び皮のなかに吸い込まれていくのが見えました。

「て、手を放してくれ」

彼は懇願しました。私は手を離しました。が、彼が両手で陰嚢を庇う前に、拳でその睾丸を殴りつけたのです。彼は泣き出しました。立ち上がろうとしましたが、私は脚で睾丸を踏みつけ、彼は再び床に転がりました。彼が睾丸を手で覆ったので、「手をどけて」と命令しました。彼はおずおずと手をどけました。彼の陰嚢は今やだらしなく緩んでいます。ジョーイの睾丸を打ったとき、そうであっただろうように。私は、ついさきほどまで彼に甘美な瞬間を与えてくれたその睾丸を平手で叩きました。

彼を強くし、彼の筋肉を盛り上げ、彼に大声をあげさせた睾丸は、いまや彼を弱々しい哀れな物体に変わってしまいました。私は、さらに彼の睾丸を叩きました。

「たのむ、やめてくれ」

彼は、呻きました。

「何でも、言うとおりにする、だから、やめてくれ」

私は屈み込んで彼の耳元で囁きました。

「じゃあ、まず、その包茎を直してあげる」

私は、彼の亀頭を覆う皮に爪をたてました。皮から血が噴き出しました。

私は立ち上がると、彼の左側の睾丸を踏みつけました。彼は嘆願するように私を見ました。顔が恐怖にこわばり、涙がぼろぼろとこぼれ落ちていました。私は全体重を彼の睾丸をふみつけた

足に乗せました。一秒後、私の足の裏で、睾丸が弾ける感触を感じました。

私は、何をしてしまったのか、すぐに悟りました。ジョシュは気絶していました。彼の体は不規則に痙攣し、陰嚢の左半分がぺっちゃんこになっていました。

私は屈み込んで、彼の潰れた側の睾丸を掌でいじくってみました。私がやったことを噛みしめるために。私は、もう一つの睾丸を見ました。やってしまった。もう引き返せない……。やらなければならない。

私は残ったほうの睾丸をつかみ、両手でぎゅっとひねり潰しました。それは、私の手のなかで弾けました。

神様、どうしたことでしょう。かわいいジョシュは、ついさっきまで気持ちよさそうに呻いていた床に、ごみくずとなって横たわっています。私は、彼の男性としての生殖能力を奪ったのです。どんなに手を施しても、もはや元には戻らないでしょう。楽しむことも、女の子をひいひい言わせることも、出来なくなったのです。

私は、アパートを出ました。私は服をつけたままでしたから、余計な時間をとらずにすみました。家路を急ぎながら、彼の仲間がアパートに帰ってきて、潰れてしまった陰嚢の上にだらりと乗った皮かぶりのペニスを晒け出している友人を発見する場面を想像していました。